

小学校体育における運動有能感を高める授業づくり

－マット運動の授業実践を通して－

新山壮一郎（秋田大学大学院）

1. 目的

本研究では、運動有能感（3因子で構成）を高めるための工夫をした体育授業を実施し、非実験群との対比からその効果を検証すること、学習者の技能段階ごとの実施単元前後における運動有能感の伸びの変化について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

- 1) 対象者：公立小学校5年1組30名（実験群），2組30名及び3組30名（非実験群）。
- 2) 調査方法：岡澤ら（1996）の作成した運動有能感測定尺度を用いた質問調査紙によって、児童の運動有能感を測定する。実施単元の前後で質問紙調査を実施し、運動有能感の変化について、単元前後で実験群と非実験群を統計的に比較する。また、体育授業における学習者の運動技能の上位群，中位群，下位群の比較を行い、単元前後の運動有能感がどのように異なるのかを統計を用いて分析する。
- 3) 分析方法：単元前後の運動有能感の平均値の差について、実験群と非実験群を対応のないt検定を用いて比較した。また、運動技能の上位群，中位群，下位群の運動有能感の伸びの差を、実験群と非実験群ごとに、一要因の分散分析及び多重比較を用いて分析した。

4) 運動有能感（3因子）を高めるための工夫

「身体的有能さの認知」：個人の技能段階に合った課題や練習の場の設定。

「統制感」：こつを意識させる。下位教材の活用。

「受容感」：教師や友達からの称賛，児童同士の教え合いの場の設定。

3. 結果

1) 単元前後の平均値の差の比較

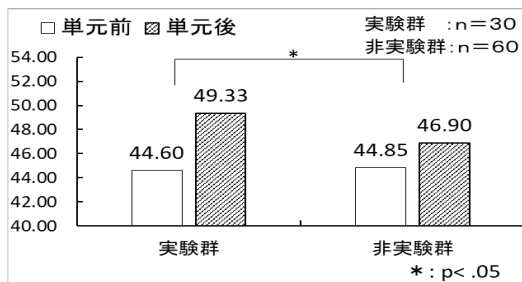


図1. 運動有能感の比較

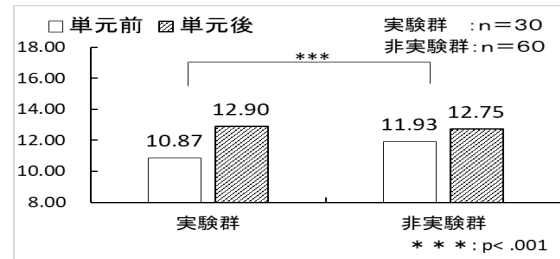


図2. 身体的有能さの認知の比較

図1より、運動有能感の合計に有意差が見られ ($p < .05$)、因子ごとの比較では、図2より、身体的有能さの認知に関して有意差が見られた ($p < .001$)。統制感, 受容感の比較では有意差は見られなかった。

2) 技能群ごとの単元前後の差異の比較

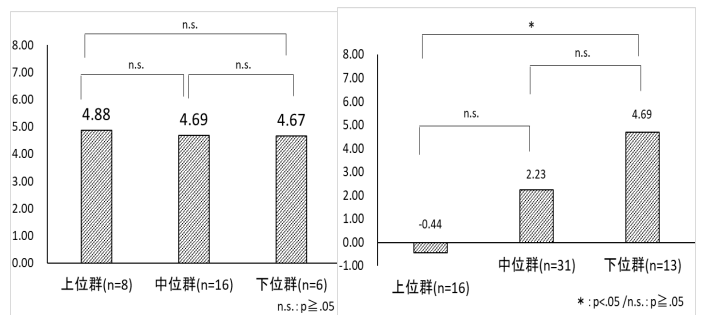


図3. 技能別（実験群） 図4. 技能別（非実験群）

実験群については、運動技能に関係なく、児童の運動有能感が高まっていた。また、非実験群については、下位群が最も高まっており、次いで中位群であったが、上位群については低下していた。

4. 結論

本研究によって、今回実施した運動有能感を高める授業が、子どもの運動有能感を高めることに効果があるということが示唆された。加えて、今回実施した授業は、特に「身体的有能さの認知」の向上に効果があるということが示唆された。また、運動有能感を高めるために工夫した授業によって、運動技能の上位群，中位群，下位群のいずれの児童に対しても、運動有能感が高まったということが明らかとなった。

5. 主な参考文献

- 1) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎（1996）運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16 (2) : 145-155.